

魅せられて綴る藩文学（八）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町二一九）

（※前号よりの続き）

十月 六日 改月旦評。益太加三級上。

十一月 十三日 史記世家卒業。命増太開本記會業。

今月になって淡窓の病勢は益々猛しく、日々変らぬ病状の為會業できず、遂に本記會業を増太に命じて開講させた。

淡窓建私塾規約によると、四級上以下は下等生であり、専ら輪読、輪講、会講等に勤しみ、毎回会頭による優劣の判定を受ける立場にありながら、去る九月十八日にはすでに師に代行して講じている如く、今本記會業をするに至ったことは、比類なき拔字の人であったと察せられる。

二十四日 使増太託於俵屋藤四郎。発答中島幹

右衛門。

古田恵十郎書（託増太）

二十六日 協副監兼句讀監。増太副監兼史記會

統。

塾では全門生に各々その才能学力に応じて職務を分担させていた。

増太の職名は副監兼史記會統（頭）即ち第二室に居て舎長を兼ね、教場にあつて史記の会読を仰せつかることになったのである。

二十七日 協罷句讀監。此日頭痛。増太代之。

協休み代つて増太句讀を授ける。句讀点する時間は線香二本を焚くを限りとして、賞点五十点より失するを消権していく三奪九級の月旦評を決める一教科である。

二十九日 改月旦評。増太加四級下。

十二月 晦日 酒掃設張如例。諸生守歳於楼上者三

人。協。健推。伯榮。桂林園二日と。

増太。屯。夜安石。協。益多。元硯

等至。談話過三更就寢。

桂林園の酒掃を行ない、塾舎で越年するもの南家楼上に三人、桂林園に益多と屯二人、夜淡窓を訪ねて三更に至るまで談話し、去り行く文化十三年を惜しんだ。

文化十四年(一八一七)

正月 二日 開講。講無逸篇。聴者、協。益多。

潤二。元碩。完五。松吉郎。伯榮。

海賊。同潤二謁宮大夫及大原山神。

遂到大超寺。謁墳墓而歸

二日より開講、新年のため本講をはなれて講義した。聴者は越年したものの外三人を含む八人で、講義終了後淡窓に伴って神社に詣で路々大超寺に至って、墳墓を謁して歸る。その後、午後(正午)に北家の招きに赴き、未時(午後二時)には三松齋壽の座客に招かれ、日暮時に歸る。

三日 開儀禮輪講。會者、協。益多。健推。

四日 開左傳講。聴者、協。益多。潤二。

元碩。健推。……他九名

使協開史記講。

五日 使益多開史記本記會業。

十二日 合谷儀策歸郷。會門生而觴之。協。

益多。潤二。元碩。……他凡二十五人

合谷儀策は後の劉君鳳の事で、桂林園五子の一人である。(後述)

帰郷に際して門生三十人余りと益の会を催した。

十五日 益多。屯。自桂林園移居東樓。

桂林園を居としていた二人、益多・屯は新たな居東樓に移るようになった。淡窓は経営上幾つかの問題点を改善するためであった。

先ず、日々に増す入門者で塾舎桂林園は狭くなったこと。桂林園の敷地は借地であったこと。初め桂林園を開塾したとき、その年の冬に疫症を病んだ人々は、口々に桂林園の普請は金神に当たるといったこと。やむなく魚町に居して、桂林園を經營するに数多の財力を費したことに居して、桂林園を往來するの一日四丁の道は遠すぎ、塾生の行事に於て、耳目不行届き事の多いこと。

桂林園を開塾してより凡そ十一年目になるが、これら

の問題点は今にして解つたことではなく、一日として忘れたことのない点であつた。

淡窓は一つでも改善しようと、塾生と同居するか、または塾舎の側に一室を築くかしたかつたが、家族親戚に反対され叶わなかつた。

門生に愛情をもつて接する淡窓は、これが為に門下は久しく振わなかつた。桂林園の十年は頗る失策であつたと、また、古田豪作の死は淡窓のこれまでの経営に大きな反省を促した。

「一朝に一家の主となること桂林園に始まる」と言われた人の厚意は忘れてはならないと、桂林園の移築に踏みきつたのである。

十七日に桂林園を毀ち、その屋材を堀田の地に運んで、移築の準備に取りかかつた。

二十日 (甲子) 在田町。 暁雨。 臥聽鶯聲。

極為清婉。

益多が夜に入つて淡窓のご機嫌を伺つたときは、極めて気分爽快であつた。ふと春かと思わせる鶯の聲が、余韻を残す夜のしじまに二人は小飲した。

二十一日 在田町。夜益多・大恵。遷於下道。

僦人家居焉。

この日益多と大恵は、東樓より下道一つの人家を借りて住むことになつた。是は先考の命により、金神の方位を避けるためであつた。なお淡窓夫妻も秋風菴に移つた。

二十七日 在秋風菴。風厲霰下。久兵衛同工人

役夫來。建柱架梁。以明吉日將上棟

故也。門生亦役其事。暮遷居於下道

僦居。與益多。大恵。屯同炊。夜間

雪下。

淡窓は秋風菴に在り、西北の風は霰まじりの中、久兵衛と大工が明日吉日につき上棟する旨を言つて來た。門生も塾舎建築に日暮れまで夫役し、真冬の暮道を下道の僦居に帰つて行く。霰まじりの西北の風も夜に入つて雪に変わり、嚴寒の夜であつた。

二十八日 是日令益多開國語講。

是日淡窓は病の床に臥し、國語の開講を益多に令した。

塾舎移築は我等が殿堂とばかりに、塾舎の完成を目指し、門生は進んで夫役するのである。塾の時間以外は夫役し、疲れきった我身を叱咤激励しながら、嚴寒の夜燈明の下に筆を走らす。

二月 八日 (初午) 在秋風菴。飯後之下道。天氣溫暖。葺塾編壁。(本宅壁) 皆畢於是日。午前同伯父及益多。詣宮太夫。謁稻生祠。

今日は初午の日、天氣も冬の中休みか温暖である。窓は朝食後下道へと散歩した。塾舎も本宅も完成まであとわずか、昼前伯父と益多と同道して、宮太夫を詣で稲生祠を謁し祈願した。

二十八日 塾成。門生移而居焉者。十五人。

(益多。令助。頼之。元長。亨。其順。東海。大恵。屯。五郎。宇治郎。春亮。玄曾。巖城。法恵) 留魚町者六人。

待望の塾舎成就、屋材は移築したものであるが、家相

の忌む所により平直にした。四十日余にして完成した塾舎は香ばしい、この日移居する者は益多他十四人であった。この落成を機して塾舎を「咸宜園」と改めたのである。

三月 朔日 改月旦評。益多加四級上。謙吉加二級下。

これより五級に進むには次の学則をおさめなければならなかった。

学則は分けて課業、試業、消権の三科となっている。益多は月旦評により第一科の課業(輪讀・素讀・聴講・會讀・輪講・書會・復文・數學・(算術))を終え、第二科試業(文章課題・詩課題・限韻・書會・句讀切・復文)に進んだ。

これまでの課業は昇級点額を得れば直ちに昇級したが、試業は試業点を得るといへども直ちに昇級することは得ず、即ち昇級点額を上点とする。となつている。この外三点の制約があるが略す。

四日 招村中父老於新宅觴之。凡十六人。

使益多往饒別坪井一助。

この日益多他門生十六人、村中の新築祝に招かれた。後淡窓の名代として坪井市助を饒別した。

四月 十日 午後與小関亨。益多小酌。山田省吾

過訪告別。

二十四日 小集。曾者、麻生伊織・釋禪・蒲池

久市・三松齊壽・小関亨及益多。酌

酒賦詩。

淡窓がこの日を待つて小集した会席である。益多が入門して以来一年にして群弟を圧し、月旦評四級上位に昇進したことを比類なき逸材と高く評価せざるを得なかつた。

益多が咸宜園を去つてのち作られた中島子玉傳に曰く「家世毛利侯に仕ふ。侯學をこのみ藩中年少才ある者を選び、他方に學ばしむ。子玉・古田子由と其選に應り俱來りて、我淡窓先生に學ぶ。時、年甫め十六、先生一見其才氣を愛し、殊格を以て之を遇す。子由疾を得て塾に歿す。人おもへらく子玉必ず畏れて至らんと。而も學を勤むること益々篤く耆も退轉の志

なし。居ること二年、群弟の冠となる。嘗て七律二十首を賦して之を先生に呈す。先生曰く、吾子才力余あり、然れども未だ詩に法あるを知らず。今後宜しく一日一首を賦して以て正を乞ふべし。吾子の為に審かに之を諭さんと乃ち此の如くするもの月餘、詩大いに進歩し頓に舊觀改む。古塾正を先生を乞ふもの、日に一詩を以て限りとなす。號して推敲といふ。子玉より始まる。」

と評した。また、淡窓が今日あるも麻生（旧館林）伊織（十四歳）をはじめ、五氏の助力が大であつたからと謙虚に評価する為と、殊に麻生伊織は淡窓（二十四歳）が初めて成章舎を開塾した時、寝起を供にして來た竹馬の友とも言うべき人であり、小関亨もまた然り、これら六氏は益多の先輩に當る門生で、月旦評も上に位する俊才であり、屈指七本めに益多をあげ、その交わりを深くするために催した詩会であつた。

五月 六日 麻生伊織歸郷。益多之柚木。休國語

講。

九日 小集。會者館林清記。三松齊壽。小

林安石。熊谷昇。而益多歸塾。釋惠

禪。蒲池久市。後至。亦皆同會。賦

詩酌酒。既夕而散。

十日 使益多起國語講。

十一日 廢史記講。是日使益多起之。

二十四日 午後設會如例。會者。茂。益多。小

林安石。三松齊壽。小関亨。熊谷昇。

館林清記。至夜二更而散。

六月 朔日 改月旦評。益多加五級下。

益多はこの月旦評によつて上級生となつた。上級生は

一月のうち二日を書會（楷書にて七行十六字太平廣記等

写す）、三日を句讀切、二日を詩會、二日を文會とす。

これを試業といい、線香三本を限りとしてこれをなす。

また上級生に限り別に消權があり、經書を講じたり歴

史を暗記するなど、予定の書籍を消化しなくてはならな

いことが必須条件であつた。

二日 使益多開世説講。

四日 午時會隈町館林清記家。會者。益多。

熊谷昇。山田省吾。三松齊壽。小林

安石。小関亨。

十日 樓上紙障成。酒掃施梯。諷詠度日。

薄暮拉益多。伯榮。亮三郎。到大原

山應神廟。歸路謁宮太夫稻荷祠而歸。

十三日 午後與合谷儀策。益多。分韻賦詩。

二十日 申時携益多。亮三郎。之渡里村。訪

村長安三郎家。遂登吹山。

六月二十四日 午後携益多赴於隈町。

昼頃淡窓は益多を携えて隈町での詩會に赴いた。先ず

丸屋七兵衛を訪れ、方山元台鄰家に集り、水明亭（地主

熊谷昇）に館林清記・釋惠禪・蒲池久市・完吾を会し夜

になつて帰る。

七月 八日 定作詩課程。市歲通計。當得古詩三

十。律六十。

この日を以て咸宜園教育の中に新たに作詩課程が定められた。

一ヶ年に作詩する順序や種類を定め、古詩三十律詩六十絶句九十をその課程とした。

九日 實爲古田子由（故家作）小祥忌辰。

不堪悽愴之感。素饌供祭。以益多爲

賓。

益多はあす一周忌を迎える豪作が来たつて、詩を贈ると夢みて一詩を賦し懷を述べた。（豪作小伝参照）

丁度一年前の今日、桂林園で再び起たなかつた古田豪作の小祥忌辰にあたり、淡窓は悽愴の感に堪えずと、白絹を益多賓客となし祭壇に供え冥福を祈つた。

午後淡窓家に詩會、小関亨・熊谷昇・児玉茂・釋惠禪・蒲池久市・館林清記・三松齊壽・及益多。入夜而散。

二十四日 午後將之新原會茂宅。與益多往。

雨甚。既至。館林清記・熊谷昇・先在焉。三松齊壽・僧惠禪・蒲池久市・後至。飲酌至夜。予乃與益多先歸。

茂送到村口。途中雨又作。流潦没路。頗困

八月 九日 是日有會蒲池久市宅約。有故不果。

因會艸堂。會者。茂・益多・熊谷昇・僧惠禪・久市・三松齊壽・館林清

記。至夜而散。

十五日 放學。手島久右衛門過訪。茂亦會至。

因同二子及益多小酌。移時而散。

放學とは嚴しい毎日の日課から塾生たちを解放して、自由時間を与えることであつた。情の深い淡窓の思いやりから始められた事と思われるが、淡窓も病弱で日常生活も疾病との闘いが絶えない為、精神的にも体力的にも必要であつた。

よつて、塾生たちは山へ川へと大いに解放感を味わい、明日からの学業に精励することができた。

今に至るまでも毎月中頃に放學の日を一日ないし二日採つてきたところであり、その事が塾生活を見事に統轄した。

十七日 午後將會才田蒲池久市宅。與益多。

出。……中略……飲酌。到月登而歸。既二更矣。

二十三日 發與中島幹右衛門書。

去る日、益多の父幹右衛門から海の幸など産物を贈つてくれていたので、礼状を出した。

二十六日 改月旦評。益多加五級上。

九月 三日 午時携益多之渡里村。會釋惠禪宅。

會者。茂、吉田紀四郎。合谷儀策。

釋玄海。熊谷昇。方山完吾。館林清

記。三松齊壽。蒲池久市。入夜而散。

この日は合谷儀策が、かつて旧友の釋惠禪宅を訪ねた、旧友温むる催しであつた。

儀策が淡窓門を去つて秋月に遊学し、紀四郎門に入つて、その師と共に來遊した詩会であつた。

五日 吉田紀四郎過訪。伯父。益多亦會。

九日 放學。巳時陪伯父登高。伯母妻良兒

奴婢使輩。凡十餘人。益多。圓重。

亦往。謁大原及本宮神。未時歸家。

十日 午後携益多。會三松齊壽晚晴樓。會

者。吉田紀四郎・合谷儀策・兒玉茂。

釋玄海・惠禪。蒲池久市・館林清記

・小関亨・日晡而原震平瑾次郎・釋

圓隆・熊谷昇至。自有詩會。是日為

盛。至二更而散。

日暮(午後四時)原辰平が弟瑾次郎を携えて來遊し限町に留まり、三松齊壽を訪ねての詩会である。淡窓はこの日尤も盛んな詩会であつた。

十一日 原辰平携瑾二郎來訪。小酌。小関亨。

益多。亦陪焉。暮到佐藤玄猷家。訪

辰平為別。莊子卒業。

十三日 徂徠集開講。夜熊谷昇・館林清記來

訪。賞月小酌聯句。益多亦陪焉。三

更後散。

二十一日 未時陪伯父。詣城内觀音閣。益多・

令助。元長從焉。日暮歸家。

二十二日 上塚。益多隨焉。

二十四日 午後會艸堂。如例。會者。益多。館

林清記。兒玉茂。釋惠禪。賦秋晚詩

七律為體。入夜而散。

十月 三日 未時携益多。潤二。亮三郎散步。

四日 天皇以八月。傳位於太子。改元永長。

未審信否。

九日 午後携益多集館林清記家。清記拉而



渡江。會穴平觀音菴。會者。兒玉茂。

釋惠禪。蒲池久市。熊谷昇。而完吾

後至。入夜而歸。

益多淡窓に伴つて館林清記を訪、清記を引いて隈川を渡り、穴平の觀音菴に會す。この觀音菴は懐しくも淡窓十二歳の時の思い出の地であり、距ること二十五年今はなき旧遊の人々を偲んで、感嘆に堪えず詩を賦し思いを馳せた。

二十四日 日暮小関亭來。重致清記意。夜乃携

館林伊織。益多往焉。亭先在焉。酌

酒賦詩。至三更與益多歸。

二十五日 明府鹽野谷君到縣。自三河口君歿。

到此殆五年。縣始有幸云。

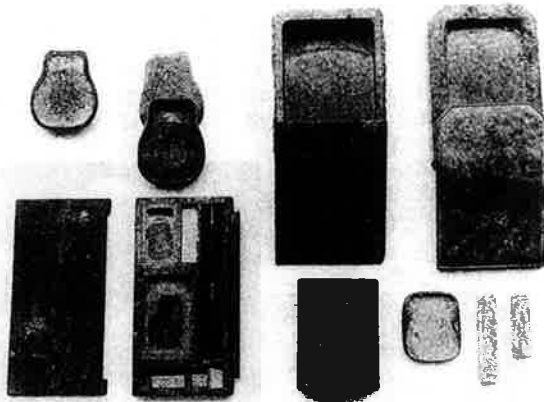
文化十四年十月二十五日付けで、塩谷大四郎正義日田県代官に着任した。

前代官三河口代官歿してより殆ど五年にして、我県に始めて主宰あり。と

十一月 十三日 使益多。萬菴（令助改名）。元長。

私起世説。史記。孟子。十八史略講。以門生不可久廢業也。

去る九日淡窓の母死去、父去つて二十五年侍座して曉に到り、十日の未明に歸る。益多他三人に留守を託し、午後葬式を出した。三日間内外の書生休業し、今日益多・萬菴・元長らが講なす。



子玉愛用の硯類（中島家寄贈目録より）